

中国語の韻母について

岩 崎 皇

0 . はじめに

中国語の発音を教えることは難しい。その原因を考えてみると、中国語の発音そのものの難しさの他に、ピンインという記号の理解のし難さがあるように思われる。

ピンインはその韻母について言えば、いわば、聞こえる音を記号化しているのではなく、言おうとしている音を記号化している。従って、これを音声学的な記号と考えてしまうと、正しい発音ができないばかりではなく、よく見受けられる「べったり」とした「ふにゃふにゃ」した発音から抜け出すこともできない。

「言おうとしている音」とは、簡単に言うと、そのように舌を動かそうとしている¹⁾ということであり、ピンインのこの性格を考えると、音節末尾鼻音-n,-ng の問題は看過できないことのように思える。

1 . ピンインの教えにくさ

単母音を終えて複合母音²⁾にはいると、a,e等の表わしている音が明らかに変化してしまう。これは、ピンインが音韻論的記号であって³⁾、聴覚上の違いで字母を使い分けているのではないことによるのだが、このことはなかなか理解しづらいことである。というのも、我々はどうしても字母を一つ一つ読んでいって音節を発音しようとするからである。

例えば、ian とあれば誰でも「イアン」と発音したくなる。この場合のaは「エ」と発音するとどの教科書にも注意してあるのだが、このように発音する学生は

多い。また、yuan が「ユエン」と聞こえる⁴⁾ ことも記号からは解せないことであろう。

このような例に説明を加えるとすれば、前後の音の影響でこうなるのだということであるが、中国語のリズムに慣れていない初学者が日本語を発音する要領でやるなら、何の苦もなく「イアン」「ユアン」と言えるのだから、納得することは難しい。初めから「エ」と言えというのはやむを得ないことなのかも知れない。

単母音と複合母音では字母の表わす意味が異なっていると考えざるを得ない。単母音は単音だから、舌の位置等(調音点)を一旦決めてしまえばそれ以上動かすことはない⁵⁾。これに対して複合母音はまさに舌の動きそのものであって、ピンインではそれを始点と終点(二重母音) 場合によって更に経過点(三重母音)を示すことによって表わそうとする。

このように舌の動きを表わすものと理解すれば、實際上その音が実現されなくても、それを発しようとする舌の運動がなくなってしまうわけではないことがよく分かる。

例えば、儿化に関して「-ng で終わる音節はng を取り去り、その前の母音を鼻音化する」というような説明を見ると、単に舌を反らすと言うこととあまりにも異なるこの説明に疑問を感じざるを得ない。発話者がこの説明の内容をそのまま意識して行っているとは到底思えないから。

確かに、現象としてはそうなのだろう。が、問題はなぜそうなるかである。私は以下のように考える。

-ng は舌根が大きく持ち上がって口蓋垂と閉鎖をつくっている。この大きく盛り上がった舌根の反対側にある舌先を持ち上げると、シーソーのように舌根の隆起は少し下がる。これは舌の筋肉組織の関係だろう。つまりそれまでの閉鎖されていた部分に隙間ができるのだ。この運動で-ng は取り消されてしまう。そして、口蓋垂はその儘だから鼻腔にも口腔にも息は流れ、-ng の前の母音の音色が鼻音化されて続くことになる。

このような過程だとすれば、発音する人間からすれば、その他の儿化と同じ

く単に舌先を持ち上げていると意識されるだけであろう。同じ記号(-r)で表わすことは理にかなっている。

我々が何らか「る」のような音を期待してしまうのは、字母が聞こえる音を表わしていると考えるからであり、更に、-ngr をそのように発音してしまいがちなのは、-ngの舌の形をきちんと作っていないからである。舌根の緊張がなければ、いとも簡単に、r そのものの音になってしまうのだ。

2 . -n と -ng

-n,-ngが発音運動の終点を示しているのだから、たとえその音が、声が弱まって実際の音声にならなくとも、或いは実現する前に次の発音運動に移ってしまうことがあっても、-n,-ng を発音しようとする努力がなくなる訳ではない⁶⁾。

それでは、どうやってその舌の位置を学ぶのか。

まず『あんないの「ん」、あんがいの「ん』』という言い方は、結局どちらも「ん」だとの先入観を与えて良くないように思う。ただでさえ、日本語の耳ではともに「ん」としか聞こえないのだから、それに抗して違った音なのだということを強調しなければならない。もちろんそう説明すれば事が済むというものでは全然ないが。

外界の音を聞くのとは異なり、自分の声は通常ははっきりと聞こえるものである。テープ等では全く区別できない-n と -ng も、自分で発音してみるとその違いに気付やすい。

しかし問題はどうかしたら-n,-ngを正しく発音できるかである。『あんないの...あんがいの...』としか説明のしようがないのだろうか。おそらくこの説明に従ってやっても区別は付かないだろう。なぜなら、『あんがいの「ん』』では調音点が本来の-ngより前に来てしまい、-nの調音点と近くなってしまうから⁷⁾。そして、調音点が近づけばそれだけ音色は似てくるから、区別は更に難しくなるという訳である。

音の説明は、その音が発音できたとき初めてその意味が分かることがしばし

ばである。言葉だけで説明できるとの思いこみを止め、とにかく声が出せるように簡単な指示を与えることだ。例えば次のように。

-n は『唇を横にひき、舌先を上歯茎につけたままで「ヌ」と言う』⁸⁾。

-ng は『鼻からだけ息が抜けるようにして「グ」と言う』⁹⁾

ただ、注意すべきは、発音は音のイメージに向かってなされるものであるから、はじめから区別できる音をイメージさせることである¹⁰⁾。上の例でいえば、-n は「ヌ」、-ng は「グ」である。『あんないの「ん」、あながいの「ん」』ではどちらも「ん」をイメージさせてしまい、区別などできようもない。

-n に「ヌ」とフリガナを振ることは以前から行われている。聴覚的にそのような音に感ずることがしばしばであるし、もちろんそれは調音点の類似に原因している。同様に -ng は「グ」という響きを持ち、このことは第二声、第三声の音節において特に確認しやすい。これもまた調音点に原因していることは言うまでもない。

しかし、-ng を「グ」としても、先に述べた調音点の問題がうまくいかない。更に舌を奥にひくように指示しなければならないのだが、単に「舌を奥へ」では舌先を持ち上げる者がでてきたりする。これにはなんだかんだ言うよりも、舌をひく練習をしておくしかないと思う。

日本語の母音の中で調音点が一番奥になるのは「オ」であろう。そこで、「エオ」を繰り返し言って、しまいには「エオ」と声に出さなくても、そのように舌を動かせるようにしておくのだ¹¹⁾。その感覚がつかめたら、更に奥へ引くこともできるはずだ。

-ng は日本語では通常使わない位置まで舌を引くので、舌根が喉を刺激して、ちょうど物を吐き出すために指をつっこんだ時のような感触を覚えることがある。やり過ぎたのかも知れないが、私は練習中軽い吐き気を感じた。

こうして、-n,-ng を長く引き延ばしながら自分の口で交互に言ってみると、違っていることは確認できる。その印象を確認しつつ、テープやCD等を聞いてみると、ゆっくりとした一音節の場合は耳でも確認できるはずだ。

-n,-ng は母音のように引き延ばすことができるが、音を長く延ばしている時の

音、つまり持続部の音色と、持続部の短い所謂「わたり音」を含んだ音の場合は多少印象が異なる。一音節の発音を聞いていて第2声、第3声がよりはっきりと聞き取れるのは、それらの声調では末尾に力を入れるので、-n,-ngが相対的に強く発音され持続部が長くなるからではないだろうか。

とにかく、-n,-ngは微妙な違いであるから、印象が定着するのにかなりの時間を要する。繰り返し練習することが必要だ。

3 . 単母音

発音練習の際、舌の位置を説明することがあるが、前に出させるためには「イ」と言えといい、後ろに引かせるには「オ」と言えというふうに指示しなければならない。これでは日本語でとらない位置には舌を持っていくことはできない。舌の位置や動きを意識する練習も必要ではないかと思う。

例えば、調音点の高低は、口の開きに注意させたら良いと思う。音声学では通常口の開きを言わない。ある母音を発する場合、それ固有の開き方があるとは断言できないからである。練習次第では鉛筆をくわえたままであらゆる母音を自由に発音する事もできるらしい¹²⁾。ここまでやらなくとも、腹話術などを見ればそれもそうかとは思ふ。

しかし常識的には発音しやすい口の開き方というものはある。そして、何より、音声学で問題にする、舌の一番盛り上がったところと口蓋との距離など、通常的手段では知りようもないのだから、母音四角形や頭を縦割にした図を見せられてもそれを自らの頭に当てはめる術がない以上、高母音、低母音と言われてもどうにもならないではないか。

「イウエオア」と言ってみると、「イウ」の開きが狭く、「エオ」がやや広く、「ア」が一番広いと感ずる。つまり「イウ」が高母音、「エオ」が中母音、「ア」が低母音だということだ。この程度の区別は誰でもできるであろう。

また更に「イウ」と「エオ」を繰り返し言ってみれば、「イ」「エ」は舌が前寄り、「ウ」「オ」は奥寄りである事にも気付く。このとき「イ」「エ」は唇が平

たく、「ウ」「オ」は丸い事も確認できる。

イ	(ウ)
エ	(オ)
ア	

言われるまでもないことと思われるかも知れないが、こんなことから始めなければ、舌を動かすということがどういう事なのかは分からないのではないだろうか。

上の区別に中国語の単母音を当てはめれば、

i(i)	u
ê	e(o)
a	

uの発音は日本語の「ウ」より明らかに舌が奥寄りである¹³⁾。テキストには唇を強く突き出すというような注意が書かれているが、これはそうすることによって舌がより奥にはいるからであろう。

思うに、日本語は中国語に比べ、調音点が前に偏っている。中国語の子音g、kなどの舌根音も、日本語の「グ」「ク」などの子音と同じではない。両言語において共に奥舌といわれているだけに、ただでさえ感覚の鈍い部分のことであるから、この違いは気付きにくいことである。

「あんがい」の「ん」がngだと説明される事が多いが、ngとgの調音点は同一であるから¹⁴⁾、この「ん」もngよりも前寄りなことはすでに述べた。

4 . おわりに

およそ二十年前、私が中国語を習い始めたばかりの頃、-n と -ng は何度テープを聴いても違いが分からず、本当にこのような区別があるのか疑いを持ったほどであった。練習しようにも方法が分からず、全く取り付く島もない難問であった。

その後、教師になってからも本で読んだことを繰り返すだけで、毎年苦しい思いをしてきた。というのも、発音は試行錯誤の過程が必須だから、まず学生に発音させ、それを矯正していくことが教師の仕事ではないかと思うからである。

ここに書いたことは私の体験に基づくことであり、どれほどの普遍性があるか分からない。また、通常の方法での発話において、区別できるところまでは至っておらず、全面的な解決にはほど遠い感じがする。

「-n と -ng の区別など日本人には無理だ」とか、「そんな難しい区別をしなくても、言葉には意味があるのだから、何を言っているか分かれば良いではないか」と言われそうだが、そのように紛らわしいものであるからこそ、初めから正しく練習し続けていたらと思う。

- 1) もちろん発音は舌のみによってなされるものではないが、主要な働きをするということから、その他の発音器官を代表させる。
- 2) 小論では -n, -ng で終わる物も含めてこう呼ぶことにする。
- 3) 音韻論的記号としては、字母をもう少し節約することができる。o は使わず、例えば bo は /be/, ao は /au/, ou は /eu/, ong は /ung/, iou は /ieu/, iong は /iung/ とし、更に j, q, x は g, k, h としてしまうことが可能である。徐世榮参照。
- 4) yuan を「ユエン」と発音したり、「ユアン」と発音したりするのは個人差のようでもあるが、同一人の発音でも「ユエン」となったり「ユアン」となったりすることがある。
- 5) 人により e の発音が単音に聞こえない場合がある。これは最後に口の開きを大きくするためだと言われているが、平口で舌を奥に引くのは生理的に無理がありいきなりは所定の位置に持っていけないからだと思う。
- 6) 那須1986はある意味において、-n, -ng が、聞こえる音としては如何に実現されないかを考察したものとも理解できる。

- 7) 朱川 1981 「日本人学生は -ng の調音点が前寄りになって、その後の口腔も共鳴するので、-n と -ng の中間の音色になってしまう。」(84 頁)
- 8) 那須 1986 は次のように述べている。『舌尖を歯茎に当てる、というだけの簡単な説明では不十分である。口蓋化について明示すべきであり、同時に、核母音が円唇母音であっても、n を調音する段階では平唇ないし非円唇となる点にも注意する必要を要する。……。an はアンナイというときのアンである。というような説明が行われているが、これでは完全な調音は期待できない。もし、日本語の例をひくとすれば、アンチャク(安着)、カンチュウ(寒中)、シンニュウ(進入)、エンチョウ(延長)、サンジャク(三尺)などがよい。「ジ・チ・ニ」の拗音が後続する場合に先行の「ン」が口蓋化したnになる可能性が強いからである。』
- 9) 那須 1986 は次のように述べている。「ang はアンガイのアンである、という説明をよく見るが、これは好ましくない。朱川氏の指摘のように、日本語のンは調音位置が前寄りとなる傾向があるからである。もし例をあげるとすれば、アンゴウ、シンゴウ、カンゴといった例のほうが、多少は前寄りとなるおそれを防げると思うが、鼻濁音にならない関西式の調音では、やはり前寄りとなる傾向を免れがたい。」
- 10) 通常我々が発音する時、聴覚上の音のイメージと発音器官の運動とが密接に結びついている。従って、ある音を発音する場合その音を発音しようと思うだけで口は自動的にその音を発音するように動く。舌の位置等に顧慮することは全くない。
ところが新たな音では、音のイメージもあいまいであるし、もちろん発音器官との運動も確立されてはいない。教学ではもっぱら発音器官の動きを説明することになるのは、結局のところ、音のイメージはその個人が自ら作り上げるしかないからである。
例えば単母音のeを「口の形をエをいう時のようにしてオといえ」等と言ったりするが、この初期の状態では、たとえeの音が発音できたとしても、その人は「オ」といつもりで発音しているのであるから、音のイメージは「オ」であろう。そうするとoとイメージ上区別が付かないことになる。
発音の修得とは、その音のイメージが鮮明になり定着すると同時に、それと発音器官の運動とが自動的に連動するようにすることだ。
- 11) 斉藤 2000 の見解は示唆に富む。
- 12) 服部 1984、第5章 § 4 参照。
- 13) 朱川 1986、106 頁参照。
- 14) 周祖謨 1998、及び徐世榮 1999 参照。

参考文献

- ユアン・レン・チャオ 『言語学入門』 岩波書店 1980.2.25
 服部四郎 『音声学』 岩波書店 1984.6.28
 李明、石佩文 『漢語普通話語音辨正』 北京語言学院出版社 1986.3

中国語の韻母について

- 朱川 「漢日語音対比実験研究」『語言教学与研究』1981年第4期 1981.9.10
朱川 『実験語音学基礎』華東師範大学出版社 1986.8
那須清 「中国語の音節末尾鼻音」『北九州大学外国語学部紀要』第59号 1986.10
呉宗濟 『現代漢語語音概要』華語教学出版社 1992
周祖謨 『漢語拼音字母學習法（修訂本）』語文出版社 1998.6
徐世栄 『普通話語音常識』語文出版社 1999.1
斉藤厚見 『英語発音は日本語でできる』筑摩書房 2000.11.20

参考資料

- | | |
|-------------------|-------------|
| 实用漢語課本 カセットテープ | 東方書店 |
| 漢語普通話語音辨正 カセットテープ | 北京語言学院出版社 |
| 説漢語 カセットテープ | 北京語言文化大学出版社 |
| 話す中国語北京篇1 CD | 朝日出版社 |